う

# 国語問題

**はじめに、これを読むこと。**

**（注意事項）**

1. この問題用紙は十七ページまである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験番号が正しいかどうか受験票と照合して確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル（いずれもＨＢ・黒）で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. **文字は楷書で正確に書くこと。**
9. **解答用紙は持ちかえらないこと。**
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六十分である。

（マークの記入例）

| 良い例 | 悪い例 |
|---|---|
| ● | ◉ ⊗ ◍ |

(一)

次の文章を読み、後の問に答えよ。

近ごろ、「クオリア(qualia)」という言葉をよく耳にする。「感覚質」などと訳されることもあるが、そんな訳語を聞いても、どうも分かったようで分からない。とはいえ確かなのは、このクオリアが「人間の知識」という問題にかんする、かなり重要なキーワードらしいということである。

まあこういう概念は、厳密な定義を聞いてもピンと来ないのが常なのだ。めげずにおよその説明を試みてみよう。要するにクオリアとは、読者であるあなたの心のなかに生じる、一回かぎりの「感じ」のことに他ならない。もう少し難しくいえば、個々の人間の意識のなかに特定の体験として出現する感覚イメージのようなものである。

よく例にあげられるのは色の質感だ。同じ真っ赤な大輪のバラを見ても、その感じかたは個人によって千差万別である。ある人は深く鮮烈な色調にうっとりして、ロマンティックな幸福感をおぼえるかもしれない。べつの人は、毒々しい血みどろの惨状を思い出し、吐き気がしてくるかもしれない。そしてまたべつの人は、損得勘定以外は頭になくて、このバラは高くつくだろうな、とつぶやくだけかもしれない。

主観的な感じやイメージは、各人の興味や過去の体験、そのときの気分などにも大きく左右される。千差万別なのは当たり前のことだ。

ただ、ここで大切なのは、「同一波長の赤色光を人間の視覚器官がとらえたとき、それが引き起こす印象がさまざまに異なる」というだけにとどまらないことである。そもそも、ある人が感じている「赤」とべつの人が感じている「赤」とは、いったい同じなのか違うのか判定しようがない、という点が肝心なのである。

いや、それなら、なぜ赤信号で止まれという交通ルールが守られているのか、と反論が出てくるかもしれない。共通の赤色を見ているから、交通ルールが機能しているのではないかというわけだ。[ a ]。

私が見ている赤信号の色Xと、あなたが見ている赤信号の色Yがまったく異なっていても、私とあなたはともにきちんと交通

ルールを守ることができる。（中略）私は信号がX色になると立ち止まり、あなたはY色になると立ち止まる。二人ともそのように環境に適応(fit)して生きているだけのこと。客観的、絶対的な「赤」なる唯一の事物が存在し、それを全員が正しく認識しなければならない必然性などありはしない。

このことは、「痛み」を考えればいっそうはっきりするだろう。

われわれはよく「お腹がむかむかする」とか「胃がしくしく痛む」とか言うことがある。それで自分の辛い感じが相手に通じると信じこんでいる。だがいったい、私の「むかむか、しくしく」とあなたの「むかむか、しくしく」とがぴったり同じだという保証はどこにあるのだろうか。A 私の痛みは、私独自のクオリアなのだ。

このことは、外国暮らしで病気になると痛感せざるをえない。私は以前、フランスで暮らしたことがあるが、このとき持病の腰痛が再発した。日本より冬の気温はだいぶ低いし、シャワーだけでバスタブのないアパートで冷えたからかもしれない。だが、医者の診断をうけたところで、私の貧弱なフランス語でわが腰の、突っ張るとともに腹にズシンとこたえるような重苦しい有りさまを、いったいどのように「正確に」描写すればよいのだろうか。下手をすると誤解され、治療と称して何をされるか分からない――そんな恐怖があって、病院にも行かずひたすらベッドに横たわっていたものだ。

痛みとはこのように徹底して個人的なものである。いや、痛みだけではない。よく考えれば、われわれの喜怒哀楽をともなう体験はみな、取り替えのきかない個別の身体をベースにしたクオリアから成りたっている。微妙で割り切りがたい感覚にもとづいて、主観的な世界イメージが構成されるのだ。

われわれはよく、情報や知識を共有するとか、心を開いて共感するとか言う。だが、それらはあくまでも、心がほんとうは閉じているという絶望的な事実をふまえた上での、一種の希望以上のものではない。

心とは徹底的に「閉じた存在」なのである。自分の痛みのようなクオリアは、他人には決して分かってもらえないことが、その証拠といえる。

ところで、世界イメージが宿る「心」はいったいどこにあるのだろうか。

ひとまず、「脳」にあるという回答が出てくるはずだ。心臓にあるというロマンティックな回答をする人は、今やますます少なくなっている。

脳はいまもっとも注目されている研究分野の一つである。これは、ＰＥＴ(陽電子放射断層撮影法)だのｆＭＲＩ(機能的核磁気共鳴断層画像法)だのといった、脳自体にあまりダメージを与えることなく、脳内のありさまを計測する技術が急速に発達したためだ。これらの先端技術を利用すれば、これまで推察することしかできなかった心のありさまも科学的に分析できるだろうというわけである。

とはいえ、すべての心のはたらきを脳の活動だけに帰着させるのは、どうも無理がある。[B]むしろ心は、身体全体の活動と関わっていると考えるほうが、はるかに納得がいく。

前述のように、色や痛みなどのクオリアは、知覚器官からえられる感覚や、さらにそれが引きおこす感情と密接にむすびついている。ここで一つ古典的な質問を思いだしてみよう。

それは、「はたして怖いから鳥肌が立つのか、それとも鳥肌が立つから怖いのか？」というものだ。

昔の回答は、「怖いから鳥肌が立つ」がほとんどだった。もう少し一般的にいうと、脅かされるなど何らかの理由で、脳のなかに「怖い」という感情が発生し、それが身体の各部分につたわって、鳥肌が立ったり、脚が震えたりするのだ、と考えられていたのである。

しかし、いまの脳科学者は逆に、「鳥肌が立つから怖い」と回答する人が多いだろう。まず全身の身体反応があり、その状態を脳がモニターした結果、「怖い」という言語的体験が生じるという。恐怖だけではない。「笑うから嬉しい」のであり、「泣くから悲しい」のだ。つまり、[C]身体とはいわば感情の原器に他ならないのである。

これは「ジェームズ＝ランゲ説」と呼ばれる。正確にいうと、「自覚的な感情の体験より、末梢神経の生理学的反応が先行する」という理論である。ジェームズもランゲも一九世紀の学者で、発想自体はかなり古典的なのだが、最近、脳内計測による実験結果もえられ、アントニオ・ダマシオなど有力な脳科学者によって熱烈に支持されるようになった。

普通に考えると、「鳥肌が立つから怖い」というのは、ちょっと不思議な気もしないではない。何か理由があって怖いのであり、鳥肌が立つのはその表現だという常識は、われわれにしっかり染みついているのである。

だが、イヌやネコはともかく、ネズミのような、脳がもっと原始的な動物を考えてみよう。彼らの脳には、複雑微妙な感情など宿りそうにはない。だが、そんな彼らも、命の危険にさらされると、毛を逆立て、全身をふるわせる。あるいは瞬間的に逃げだす。そういう無意識的な反応がなければ、生きていけないだろう。ネズミだけでなく、魚も虫も同じことだ。生物進化史をふりかえれば、複雑な感情よりまず身体反応ありきという仮説は、まことに腑に落ちないのである。

「怖いから鳥肌が立つ」という常識は、いかにわれわれが頭デッカチの幻想にとらわれているかを示している。生き物であることを忘れ、言語論理中心、人間中心の幻想にどっぷりつかっていたことが、一九八〇年代人工知能の失敗の遠因ではなかったか。

関連して、左脳と右脳の問題にふれておこう。

よく言われるように、人間の左右の脳の機能は対称ではない。左脳にはウェルニッケ野やブローカ野など言語論理を担当する部分があり、右脳では映像や音響など感覚イメージを処理する部分がある(ただし右利きの場合)。

それで昔は、左脳がおもに人間の精神活動をつかさどると見なされ、「優位脳」とよばれていた。これにたいして右脳は「劣位脳」である。この呼び名から連想されるのは、[ b ]、といった主張である。まあ、こういった主張もそれなりの長所はあるが、人間の精神活動の主要部分は左脳の言語論理である、というのはまったくの誤りなのである。

このことは、脳に損傷をうけた患者の様子から一目瞭然だ。左脳が傷ついた患者の多くは、言葉が不自由でいかにも辛そうだが、自分の悲しい状況をきちんと理解している。一方、右脳に損傷をうけた患者は、一見したところ元気そうで普通にしゃべっている。だが実は、人格の深いところが粉々に壊れてしまっている場合が多い。自分の置かれた状況や、行為の意味などを把握できなくなるのだ。たとえ左半身が麻痺していても、自分は完全に正常だと思いこむ者もいる。

この種の患者は「病徴不覚症(anosognosia)」と呼ばれ、ダマシオによれば「情動と感情がどこにも見当たらない」のである。悲

惨なことに、彼らはいくら言葉がしゃべれても、普通の社会生活を送ることはできなくなってしまう。単に芸術的感動がなくなるというだけではない。ビジネスや勉強などで合理的な行動をするためにも、左脳の論理的推論だけでなく、右脳の意欲や感情が絶対に不可欠なのだ。

ただしここで、忘れてはならないことがある。感情は、右脳のイメージ機能だけでなく、左脳の言語中枢機能とも深く関連している、ということだ。

D 実際、そうでなければ、詩歌芸術など成立しない。われわれは身体反応を言葉で表現するだけでなく、言葉から身体反応が導き出されることもある。後者は、人間の脳のシミュレーション機能に対応している。

だからわれわれは、周囲に何も起きていないのに感情が高ぶることがある。何年も前に言われた侮辱の言葉を思いだして怒りがこみあげてきたり、恋人の甘いささやきが浮かんできてうっとり回想にふけったりする。

たぶん、こんなことは動物にはないだろう。言語的想像力のおかげで、われわれはいま自分の生きる時空間とはまったく異なる時空間を、脳のなかでつくりあげることができる。人間とはそういう特異な脳をもった生き物なのだ。

まず「言葉」ありき、「論理」ありきといった、E 転倒した近代的信念がうまれてくる理由はここにある。ここから、「怖いから鳥肌が立つ」という誤った常識もうまれてきたのだ。

（西垣通『集合知とは何か』による）

問一　本文中には文脈上意味の通らない慣用句の使い方をした箇所がある。それを六字で抜き出して記せ。

問二　空欄 a に入る文として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　一応理屈は通る　　2　だが、それは違う　　3　なるほど、矛盾である

4　そうだ、赤色に違いはない　　5　つまり、マナーの問題なのだ

問三　傍線部A「私の痛みは、私独自のクオリアなのだ」の説明として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　個々人の痛みは、生活環境により左右されるので、一定しない、ということ
2　痛みという感覚は、質的に種類が多く、他人には説明しにくい、ということ
3　個々人の感覚は厳密に言えば、他人と共有できるものではない、ということ
4　痛みの感覚は、外国語では説明が困難で、正確には伝えにくい、ということ
5　個々人の喜怒哀楽は多くの場合、他人に理解されることがない、ということ

問四　傍線部B「むしろ心は、身体全体の活動と関わっていると考えるほうが、はるかに納得がいく」とあるが、本文中で筆者はその理由をどのように考えているか。最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　単純な脳しか持たない小動物の例からもわかるように、恐怖などの心のありさまはまず身体反応として発現するから。
2　クオリアは個人の身体と密接に関連しているため、脳の自覚的な機能がその存在に圧倒されてしまうから。
3　身体こそが心の動きにとって最重要の媒体なのに、言語論理を重視しすぎた結果、人工知能開発は失敗に帰したから。
4　近年の脳科学の進歩はめざましいが、心のはたらきの全容を解明するには身体論によるアプローチしかないから。
5　言語論理に関わる左脳の分析だけでは心の動向は完全に把握できず、イメージに関連した右脳も重視すべきだから。

問五　傍線部C「身体とはいわば感情の原器に他ならない」とは何を説明しているか。最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　身体の反応は複雑な感情の一種の表現形態と考えられる、ということ
2　感情の体験は結局のところ身体によって説明できない、ということ
3　感情を生み出すのは脳であるが、脳も身体の一部だ、ということ
4　感情を引き起こす母体として身体を捉えるべきだ、ということ
5　身体とはつまるところ感情そのものに過ぎない、ということ

問六　空欄 b に入る最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　優勝劣敗は進化の定めであり、人間の脳とてその例外ではない
2　二つの機能を脳に担わせた人間は、原始的な動物より存在価値がある
3　左脳には左脳の、右脳には右脳の役割があり、代替することはできない
4　人間とは理性的な存在であるべきであり、情念に振り回されてはならない
5　感情を言語化する能力が人間にはあり、それゆえ感情表現を豊かにすべきである

問七　傍線部D「実際、そうでなければ、詩歌芸術など成立しない」とあるが、「詩歌芸術」を生み出すために必要なのはどのような能力か。本文中の言葉を用い、三十一字～三十五字（句読点も一字と数える）で記せ。

問八　傍線部E「転倒した近代的信念」とあるが、これを言い換えた語句（八字）を本文中からそのまま抜き出して記せ。

（二）次の文章を読み、後の問に答えよ。

大人は、子供に対して、ああしなさいこうしなさい、と命じている。まるで、殿様が家来を好き勝手に使えるような感じに、見かけ上振る舞う。昔は、殿様が偉くて、家来は従わなければならない存在だった。そうしないと自分の身を滅ぼすことになった。子供の場合も、まだ一人で暮らすことができず、逆らうようなことが難しい。

けれども、現代における大人どうしの関係というのは、嫌ならば縁を切ることができる。子供も大人になれば、これができる。権力というのは、個人の力ではなく、その組織におけるルール上の権限でしかない。したがって、上司の命令にどうしても従えないと思えば、その組織を抜け出すことが可能だ。そうすれば、もう命令はその人を支配できない。子供も、酷い親からは逃げ出せる。これが、基本的な原則である。

そうは言っても、組織から出ると職を失うことになるわけで、それでは自分の身を滅ぼすことに等しい、と考えるかもしれない。そこにあるのは「交換」である。つまり、品物を買うときに金を払うのと同じで、得るものと与えるもののバランスを比較する必要がある。「［　a　］」という判断はできるはずだ。両者のバランスを常に見極めることになる。

そういった基本は、誰でも知っているはずなのに、ついその中にどっぷりと浸かっていると忘れてしまう。命令する人は「偉い」という印象を持って見るから、そのうち本当に偉く見えてくる。命令する方も、自分は偉いと勘違いしてしまう。こんなところから、多くの問題が生じるわけである。

もう少し根本的なことを考えてみると、そもそも、職業によって人を差別するその以前には、階級とか人種とか、職業には関係のない「特権階級」というものが存在した。たとえば、王族とか貴族だったら、もう生まれながらにして庶民よりも偉い。貴族は特に仕事をしなくても良い。毎日遊んでばかりいられたのだ。だから、仕事をする者が偉いという考え方は、この時代にはさほど顕著（けんちょ）ではなかった。むしろその逆で、たとえば、生産行為などは、下賤な者のすることだったのだ。

ところが、数百年まえから、王族とか貴族といった階級に社会が支配されているのは良くない、という思想が生まれて、普通

の身分の人でも政治に参加ができる仕組みが作られた。中には、それまでの支配階級をギロチンにかけたりするくらい血なまぐさいこともあったわけだが、それほど革命的だったのである。

ちょうどその頃は、産業にも革命があって、大量に工業製品を作れるような時代に突入していたから、階級ではなく誰でも頭を使って頑張れば金が儲けられる、というようなドリームを大勢が抱いた。しかし、結果としては、ごく一部の人間が金を稼ぎ、多くの人々は労働を強いられるばかりで、王族や貴族に替わって、成り上がった金持ちが社会を支配するようになった。

一度そういった地位に立つと、自分たちの立場や資産を守りたい、という考えになるのは当然で、税金を払っている者しか投票権がない、というような、今では考えられないような民主主義が存在した。けっこう長くこれが続いたのである。もしかしたら、見えにくくなっているだけで、今も続いている、ともいえる。

少し話は逸れるけれど、民主主義というのは会議をして多数決で物事を決める制度のことだが、そもそもその会議に誰が出られるのかという時点で既に平等ではなかった。そこで、労働者や貧しい人たちは、金持ちの多数決ではなく、もっと別のカリスマを求め、独裁者を歓迎した歴史がある。現在の民主主義でも、マスコミが煽動(せんどう)して、国民を煽っている。そんな頭に血が上った人たちの多数決で政治を動かすようなことがあっては困る。たしかに民主主義は理想的なシステムだが、A このような危険な部分が欠点としてある。だから、理想や理念を忘れないように憲法というものが存在している、と考えて良い。

[ b ]。つまり、王族や貴族から一般階級の人たちが「のし上がった」時代に、「金を稼ぐ者が偉い」あるいは「強い」という観念が社会に広まったのである。B こういった経済的な成功者は、今でもほとんど健在で、事実上社会を支配しているといえる。だから、「人間は仕事で価値が決まる」という現実ができた。大昔からあったというよりも、むしろ最近できた考え方だといえる。

こういった社会背景から、多くの人は深く考えもせず、仕事というものは「人の価値を決めるものだ」と信じている。どんな職業かということで人の評価の大半を決めてしまっているのだ。だが、それははっきり言って間違いだし、これからはだんだん間違いは正されていくだろう。最近では、以前に比べればだが、私的情報を非公開にするのが当たり前になってきたし、尋ねられ

ても答えなくても良い場合が多くなった。こういう社会では、しだいに職業というものの価値は下がっていくはずだ。

それでも、子供には、「仕事は大事だ」「仕事は大変なのだ」というふうに大人は語りたがる。これはもう、単に「大人は凄いぞ」と思わせたいだけのことで、大人のいやらしさだと断言しても良い。

子供は、学校でけっこう苦労している。勉強も大変である。僕は、社会人のしている仕事の方が、学業よりも楽だと考えている。どちらかといえば、子供の方が大変だと思う。ただ、そう思わせては、子供も可哀相だし、大人もやりづらい。だから、やっきになって大人は「仕事の大変さ」を①捏造しているのだ。

大人の何が楽かといって、仕事は辞められるが、子供は学校は辞められない。また、事実上、子供の自由で学校は選べない。大人は仕事を選べる。これだけを取っても、子供の方が過酷である。仕事は基本的に自分の得意な分野であるはずだ。一方、学業は、不得意なものでも、(特に小さい子供ほど)しっかりと向き合わなければならない。

仕事が凄いものだというイメージを、まるでテレビコマーシャルのように大人は作っている。実際に、テレビコマーシャルになっているものもある。たとえば、「国を動かす仕事」とか、「未来を築く仕事」とか、そういう言葉の印象だけで大きく見せる。まるで、それらが「ゲームを作る仕事」よりも「やりがい」があるかのようだ。そんなイメージを植えつけようとしているのである。

しかし、既に書いたことと一部重複するけれど、国を動かすとか、未来を築くとか、それは個人の力によるものではない。そういう力を持っていると錯覚しているだけだ。権力を握るのも、大きなお金を動かすのも、仕事上の立場、つまりルール上に成り立つものであって、個人として特に偉いわけではない。「俺が国を動かした」と言いたいのかもしれないが、せいぜい、「関わった」という程度のものにすぎない。そんなことを言ったら、ほとんどの人が国を選挙を通じて動かしている。

巨大な橋の建設に関わった人は、大根を毎年収穫する人よりも偉いわけではない。そういうものに「未来」や「やりがい」があると感じさせるのは、明らかに言葉だけのイメージで錯覚を誘っている。ようするに「自慢できる仕事」みたいな他者の目を気にした浅ましさにすぎない。

もし、個々の仕事に差があるとすれば、それは賃金の高低くらいだろう。賃金の高い仕事は、能力が要求されたり、大きな責任を問われるものだ。高ければ高いなりにリスクがある。だから、それだけ神経を使う必要があって、体力的にも精神的にも②ショウモウするだろう。だから賃金が高い。逆に、誰にでもできるものは、賃金が安くなる。C このあたりは、商品と同じだ。

（森博嗣『「やりがいのある仕事」という幻想』による）

問一　傍線部①の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二　傍線部②のカタカナの部分を漢字に改めよ。

問三　空欄 a に入る最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　はっきりと苦情を述べて給料を貰う
2　命令とその指示内容を吟味する
3　組織の命令も誤っていることがある
4　仕事に見合った金額を要求する
5　金を失っても、どうしても従えない

問四　傍線部A「このような危険な部分」の内容として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　一時的な社会の雰囲気に煽られ、極端な方向に動くことがある。
2　多数決で平等を装っているが、特権階級に有利に働くことがある。
3　種々の意見が入り乱れ、事態の収拾がつかなくなることがある。
4　多数決では、全体の利益より個人の利益が重視されることがある。
5　弱い立場の意見が強くなり過ぎ、バランスが崩れることがある。

問五　空欄 b に入る最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　それなのに、である
2　さて話を戻そう
3　やはり憲法は重要なのだ
4　時に歴史は過ちを犯す
5　独裁者も法律にはかなわない

問六　傍線部B「こういった経済的な成功者」とあるが、これを言い換えた十字以内(句読点があれば一字と数える)の箇所を本文中から抜き出して記せ。

問七　傍線部C「このあたり」の指す内容として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　壊れやすいものは値段が高く、壊れる心配のないものは安いということ。
2　本来は個々の仕事に差がないのに、無理に賃金に差をもうけるということ。
3　能力や大きな責任が要求されるものは、神経を使うので過酷だということ。
4　労力や能力の必要なものは高く、それほどでもないものは安いということ。
5　能力や責任が要求されるものはリスクがあるので、需要が少ないということ。

問八　本文の論旨として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　金と権力さえあれば、仕事をする上では他者を支配することが可能かも知れないが、仕事自体に人の貴賤や価値を決定する力はない。
2　階級社会は、歴史的に見ても世界的に見ても常に存在し、そこに職業選択の自由はないが、社会秩序の安定という点では学ぶべき点もある。
3　大人は子供にあれこれ命じ服従させているが、本来、子供にも人権があり、その命令を拒否し、得意分野で生きていく権利がある。
4　「人間は仕事で価値がきまる」という現実があるが、それは古来続いてきた階級社会の名残りであり、今後も変わることはないだろう。
5　民主主義にもいくつか欠点があるものの、そこには職業選択の自由があるため、「自慢できる仕事」にめぐり合う可能性も高い。

(三) 次の文章は「我が身にたどる姫君」の一節である。主人公の姫君は遠縁の尼上らと共に、音羽山の麓の粗末なすみかにいる。そこに、后の宮の病気回復の祈りの使いとして比叡山に登った三位の中将が訪れ、尼上と親しく語り合う。二人は縁続きである。これを読み、後の問に答えよ。

いみじう夜深き雪のけはひ、荒ましき風のけはひに、例ならず人のけはひして、うちたたくなり。「誰そ」などいふなれば、「ただいみじき雪のほど、この門の陰ばかり笠宿りせむ」と開けさせて、人々あまた沓の音して、立ちさまよふなるべし。かばかり深き雪に誰ならむと、A こと好ましうする若人どもは、かいま見騒ぐべし。侍従も心化粧とか、痴なべけれど、大きなる火取りに①薫物置きて、戸口にあふぎゐたり。

いたう曇りたれど、雪に降り合ひてをかしきほどの月影に、②簀子もみな埋もれにければ、わづかなる放ち出での戸のもとに寄りゐ給へる、なべての人とは見えず、いみじうめでたきを、B 雪・氷に閉ぢられたる心地には、消えかへりめづらかなりと思ふべし。

また幼き童たどり来て、「あなたに人のいひ侍りつるは、三位の中将殿とぞ申す」といふなり。「あなかま」と手かかれて、「よな、后の宮の御悩み重しとて、御使に山に登り給へりけるが、夜をこめて急ぎ帰り給ふなる」といふにも、C すずろに胸つぶるるぞあいなきや。いづれの宮ならむと聞き給ふに、これは中宮におはすべし。尼上も「はづかしきあたりを。用意なく」とわび給ふ。

やうやう明けゆく空のけしきに、雪もすこし降りやみぬ。例の戸口に寄りおはして、「うれしき道のたよりに、かうさぶらひそめぬれば、かならずことさらになむ、このかしこまりも聞こゆべき」などのたまふ。伝へ聞こえむに [ a ] 御ほどなれば、尼上ぞ数珠ひき鳴らしてゐざり出で給ふ。

「人訪はぬ岩の懸け路の雪のうちにならはぬ D 月の影をみるかな

いともかしこきに、承りおどろき侍りつるを。たづね御覧ぜらるるもやさしかるべき庵のさまに侍れど、うちつけにや待ち E 聞こ

えさすべからむ」などぞ、いたう古りたれど、さる方にゆゑある御けはひなる。かしこまり給ふけぢめ見せて、

「あかなくに出でぞやられぬいにしへのなごりとまれる庭の月影

わざと数まへ思し召さるべき方も侍らむを、おのづからそのことと侍らぬには、たゆみすごし侍りにける」など、さまよくとりなし給ふ。

問一　傍線部①②の漢字の読みをひらがな**(現代仮名遣い)**で記せ。

問二　傍線部A「こと好ましうする若人どもは、かいま見騒ぐべし」の意味として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　物好きな若い女房たちは、様子を見て歌を詠んでいるようだ。
2　風流を好む若い侍たちは、主のすきをみてあれこれと噂しているようだ。
3　珍しいことを好む若い侍たちは、見物をして浮かれ騒いでいるに違いない。
4　異性に関心を持つ若い侍たちは、好みの人を見つけて心が落ち着かないようだ。
5　好奇心に満ちた若い女房たちは、のぞき見をして騒がしくしているに違いない。

問三　傍線部B「雪・氷に閉ぢられたる」はどのような様子を表すか。最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　外界と交渉がない様子
2　物事に興味がない様子
3　辛いことを耐え忍ぶ様子
4　心理的に圧迫されている様子
5　厳重に戸締まりがされている様子

問四　傍線部C「すずろに胸つぶるるぞあいなきや」の説明として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　女房たちの胸がいっそうふさがるのは、しかたがない。
2　女房たちがひたすら胸に秘めているのは、好ましくない。
3　女房たちがむやみに胸をどきどきさせても、何のかいもない。
4　女房たちがわけもなく胸騒ぎを感じるのは、例のないことだ。
5　女房たちがたちまち胸をときめかすのは、理解に苦しむことだ。

問五　空欄 a に入る語として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　しふねき　2　つねなき　3　はかばかしき　4　つきづきしき　5　かたはらいたき

問六　傍線部D「月の影」は何をたとえているか。最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　帝　　2　中宮　　3　三位の中将　　4　尼上　　5　侍従

問七　傍線部E「聞こえさす」の説明として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　三位の中将から尼上への敬意を表す尊敬語
2　尼上から三位の中将への敬意を表す尊敬語
3　三位の中将から尼上への敬意を表す謙譲語
4　尼上から三位の中将への敬意を表す謙譲語
5　中宮から帝への敬意を表す丁寧語

問八　本文の内容から推測されることとして最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　侍従が心遣いをしていることから、三位の中将は侍従のもとを訪ねて来たと思われる。
2　尼上と三位の中将の言葉のやりとりから、三位の中将はまた尼上のもとに来ると思われる。
3　三位の中将の詠んだ歌の内容から、このすみかは見るかげもなく荒れ果てていると思われる。
4　女房たちが幼い童を制していることから、女房たちは三位の中将を恐れていると思われる。
5　三位の中将が比叡山に登ったことから、帝は后の宮の病気見舞いをなさらないと思われる。